| | |
|---|---|
| 氏名 | 高田　冬彦 |
| ヨミガナ | タカタ　フユヒコ |
| 学位の種類 | 博士（美術） |
| 学位記番号 | 博美第527号 |
| 学位授与年月日 | 平成29年3月27日 |
| 学位論文等題目 | 〈論文〉　妄想する身体 |
| | 〈作品〉　Cambrian Explosion |
| | Ghost Painting |
| | Afternoon of a Faun |
| | STORYTELLING |
| | untitled |
| | 〈演奏〉 |

論文等審査委員

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| （主査） | 東京藝術大学 | 准教授 | （美術学部） | 齋藤芽生 |
| （論文第１副査） | 東京藝術大学 | 准教授 | （美術学部） | 布施　英利 |
| （作品第１副査） | 東京藝術大学 | 准教授 | （美術学部） | 杉戸　洋 |
| （副査） | 東京藝術大学 | 教授 | （美術学部） | Ｏ　ＪＵＮ |
| （副査） | 東京藝術大学 | 准教授 | （美術学部） | 小林　正人 |
| （副査） | | | () | |
| （副査） | | | () | |
| （副査） | | | () | |
| （副査） | | | () | |
| （副査） | | | () | |

（論文内容の要旨）

本論は、自作についての制作論である。私は、自作自演のパフォーマンスを撮影した映像作品を主要な作風としている。主に自宅アパートの一室で撮影される映像の中で、私は有名なポップアイコンや神話的なキャラクター、異形の怪物などに変貌してきた。

注目するべきは、映像の中の私が単に変装しているのではなく、何らかの偏った思い込みや、憧れ、誇大妄想にとらわれている、という点だろう。こうした「妄想へのとらわれ」が私が作品で執拗に繰り返しているテーマであり、この論文を貫くキーワードでもある。私はどのように/なぜ「妄想」にとらわれるのか。そして、それを作品化することでどのような状況を作り出したいのか。本論ではこうした問いを考察する。

第1章「蜜月的な視覚」では、「妄想へのとらわれ」という私の主観的な心の動きや、そこに生まれる自己陶酔の快楽を、特に映像の視覚的な質と関連づけながらとらえる。

ここで参照するのは、私がもっとも影響を受けている映像形式であるMV(ミュージックビデオ)である。例えば画面のシンメトリー構図、真ん中に「顔」がある点、短い尺、本質的にストーリーがない点など、私の映像作品とMVの共通点は枚挙に暇がない。こうした諸特徴は、MVが視聴者を自己陶酔に導くための「鏡」として作られていることと関係している。では、そこで生まれる陶酔は、いかなる質を持つか。

MV的映像の特徴として挙げられるのは、映像の中の身体（ミュージシャンのイメージ）と鑑賞者を仮想的に一対一で対面させ、抽象的な蜜月空間に二者を密閉してしまうことである。この密室で鑑賞者がとら

われるのは、「私の意識＝ミュージシャンの意識」だけが100パーセントの充足感と共にどこまでも広がって行くような、独我的で幼児退行的な陶酔なのではないだろうか。この章では、MVと私の作品に共通する心理的要素として、このような排他的ナルシシズムについて考察する。

第2章「二極性について」では、私が「妄想」にのまれていく様子を、時に個人史を交えながら、より主観的に記述する。この時着目するのは、私の作品に散見される二極的要素（プラスとマイナス、たとえば美と醜）の極端な対比である。

ここで前提となるのは、「自撮り」という私の制作方法である。つまり私は、自分自身の姿をモニターでリアルタイムに確認しながら作品の撮影を進めている。これは言わば、自分が観客であると同時に見せ物である空想の「一人見せ物ショー」であり、自分が「見たい」ものに自分自身を変貌させていく過程の記録なのである。そして、ここでの「見たい」欲望は、二極的なものだ。つまり、手の届かない眩いものへの憧れであると同時に、劣った醜いものへの嘲笑でもある。この二極に分裂した好奇の視線を受けて、私はスターであり同時に怪物でもあるような、普通ではない何者かに自らを変貌させるのだ。この時私をとらえるのは、自らが疎外された存在であり、それ故に特別である、という倒錯した「負のナルシシズム」であるといえよう。

二極性というテーマは、なぜ私が様々な女性イメージをモチーフとして扱っているか、という問いにも重なっていく。ここで重要なのは、私が作中で扮する女性は、いわゆる「女らしい女」ではなく、男勝りでフェミニスト的な人物像ばかりであるという点である。そして、そうした「強い女」たちの物語に共通するのは、逆境や抑圧を乗り越え自分自身の力で運命を変えていく、というどんでん返しのカタルシスではないか。つまり、マイナスが突然プラスに振れるのである。ここでは、自伝的要素として私と母親との関係にも触れながら、(私の母はフェミニスト的人物であり、私の中の「強い女」像の原型となっている)「強い女」イメージと、映像の中のカタルシス的表現との関係を考察する。

終章「妄想する身体」では一歩引いた視点から、「妄想へのとらわれ」というテーマを扱うこと自体の意味を探る。

ここで着目するのは作品と観客の関係である。例えば現代美術の実践の中で、人と人とのコミュニケーション自体を素材にする、公共的な「開かれた」作品が出現して久しい。だが、人と人との関係とは本当にそれほど「開かれた」ものだろうか。むしろ、一人一人の人間は勝手な偏見やドロドロした妄想に「閉じて」おり、しかしそれでも他人と関係せざるを得ない、というジレンマこそがコミュニケーションの本質なのではないか。ここでは、こうした視点の先駆としてヴィト・アコンチの作例を参照しながら、「閉じた」関係性について考察する。

私の作品で繰り返される「妄想へのとらわれ」は、一見すると作者である「私」の特殊性を強調するように思われる。だがむしろ私の狙いは、多かれ少なかれ誰しも抱える「偏り」を、露悪的に誇張して映し出すことにある。終章では、このように自作を「悪い鏡」として捉えた議論を繰り広げる。

本論は、「妄想へのとらわれ」をキータームに、以上のような問題を巡って展開される制作論である。本文の終わりには、付録として主要作品の解説を付け加える。

（論文審査結果の要旨）

本論文は、ビデオカメラを使って、演じる自身のパフォーマンスを撮ってきた筆者（＝高田冬彦）が、その作品の制作体験をベースに、自身のアート作品の深淵にある世界を提示しようとした試みである。

筆者は概略以下のような現代アート作品を制作している。撮影は基本的に「自宅アパートの狭い一室」、そこで「手作りのセットや衣装によるチープな自己演出」の下で、ポップアイコンや神話のキャラクター、怪物などに変貌し「キッチュで過剰、時に自慰行為めいた秘儀性を感じさせる誇大妄想の世界を繰り広げる」というものである。

その作品は、東京都現代美術館で展示されたり、海外の美術メディアに取り上げられたりと、現代アートの分野で既に一定の評価を得ている。つまり既に自身のアートのスタイルを確立し、アーティストとし

ての第一歩を踏み出し始めている。

本論文は、そのような筆者が、自身の作品について語り分析したものである。内容は、蜜月的な視覚（第１章）、二極性について（第２章）、妄想する身体（終章）と題されているが、そのどの章にも一貫して描かれているのは、筆者の極私的な思い、解釈、主張といったものである。一読すると、それは論文における「論」の展開があるというよりは、自身の思いを綴った言葉が羅列されているだけにみえるかもしれない。

そこで、この論文そのものには書かれていない、論文執筆の経緯にここで触れるのも、本論文を理解する一助になるかもしれないので、まずはそのことについて書いてみたい。筆者、はじめ、文体も内容も違う、別の論文を執筆していた。そこでは現代思想の巨匠ジャック・ラカンについての言及があり、特に「鏡像段階」というラカン理論を、筆者の作品世界と対応させて論じようというような試みがされていた。つまり、筆者が自身で演じ、それをビデオカメラの映像に納めるその制作のプロセスは、鏡に映った自己を見つめ、自己を発見し、世界の見取り図を作り上げていくというラカンの鏡の理論と通じるところがあり、筆者はそのような観点から自身の作品を読み解こうと試みた。

しかし、ラカンに依拠して自身の作品を語ることでは、どこか自身の作品の本質と「ズレ」があるように見えたのか、筆者は既に書き上げた論文を廃棄して、全く新しい論文を一から書き上げた。それが本論文である。そこには、先にも書いたように、筆者の極私的な思い、解釈、主張が溢れている。しかしそれは、現代思想のフィルターを一度通した上での思索による考察であって、そのような裏打ちがあって現在の本論文がある。いうまでもないが、はじめの論文を廃棄したと言っても、その思索の果実が、現在の論文に息づいているのは、いうまでもない。

本論文は、いっけんして、論といった骨格もなく、また他の芸術作品への言及もなく、参照している作品といえば、ミュージックビデオや映画のワンシーンといった、エンタテーメント寄りのものばかりである。しかし、そのような論文の表面に現れたものばかりにとらわれて、筆者の作品の本質、筆者の論文の本質を見落としてはならない。

その作品に、またその論文にあるのは、芸術や思想に裏打ちされた上で現れた表層の上澄みのようなものではなく、真の芸術や思想へと迫る探索の試みである。ミュージックビデオのように、表面のかっこよさや心地よさで終わるものでなく、毒や傷やいろいろな要素までも取り込んで、その先に現れる、聖なるもの、崇高なものへの志向が、筆者の作品や本論文にはある。

それは、本論文および作品の審査にあたった他の教員にも一致する意見で、論文に限って言っても、これは現代芸術のありように対する示唆に満ちたもので、純粋芸術への思考として十分に評価できるものである。また現時点での作品への評価のみならず、その将来性、これからのアートの展開も大いに期待できるものである。そのような、現時点で成し得たもの、将来性、など様々な要素が、本論文からは垣間見ることができる。

以上のことから、本論文は、東京藝術大学に提出された博士論文として、高い評価を与えることができ、よって本論文を合格とする。

（作品審査結果の要旨）

高田冬彦の論文はこれまでつくりためて来た自身の映像作品とまたそれらを制作するに参考としてきたビデオパフォーマンス、MV、映画のシーンと重ねそれぞれ言語化していきながら、結果としては四方向から見つめた比較的地味な自身の制作論というかたちになった。

しかしこれまで精力的に展示発表して来た強烈なイメージと色彩でストレートに表現する野心的な映像作品との組合せによってみなければいけない。

高田が映像を制作する上で共通する仕組みとしてパロディックなストラクチャーを軸に二極性をもたせていることである。どんな問いが来てもつくる造形物にはそれぞれ二面性を持って作られている。そして閉ざされた狭い孤立した空間で自作自演の撮影に拘る事で、公開する事により高田にまた客観的な空間が生まれ、鑑賞者にはお尻を向けながらも、その後ろにまわり鑑賞者のお尻を眺めるという構図をつく

る。グロテスクなイメージから５分程度の時間の中で少しずつ見る側の心理をずらしながら美しいものへと、または別の主題へとずらしていく救済の力があるので不思議である。強烈な薫りをただよわせる蘭の花をまじまじと見つめるような感覚である。そして頭の背後にミツバチがぐるぐる回っているような。今となって考え直すと本人もいろんなマニアックな植物を育てていると聞いていたので、この観点からもいわぬが花の部分で助けられているように思える。

高田の頭の中で膨張し続ける妄想の世界を広げていきながらも平凡な自分へのまなざしとコンプレクスの持続が独自のナルシシズムの終わらぬ追求であり、鑑賞者の心をつかみ続けていくのであろう。

これらの作品、また今後制作される高田の作品は単なる自撮り映像作品としてではなく時代が移り変わりその時取り上げた映画、MVが過去のものになろうとYouTubeの変容とともにパラレルに検証し続けるべき映像制作と考える。

（総合審査結果の要旨）

熱を帯びた眼で観者を見つめ返しながら身体をくねらせ歌う人魚の映像。(『Cambrian Explosion』)。彼女は自らを励ますミュージカルソングにのせ、人間の姿に生まれ変わるため尾ひれを包丁で切り裂く。一方にあるのは、手の中の生首から滴る血で硝子に書き上げられていくドローイングの映像（『Ghost Painting』)。高田冬彦の映像作品は正視するのが憚られるような、痛々しい居たたまれなさに満ちている。四畳半のセットとハリボテ小道具に飾られた「たった一人の主役が耽る陶酔」の行き場のなさは、耽美とはかけ離れた平凡な青年が演じているせいでますます強調される。それでいながら、えも言われぬ笑いとエレガンスを感じさせる演出の力量が、高田にはある。

高田が作り続ける映像作品は、自己分析や社会批評がまず下敷きにあるというものではない。それらはおそらく彼自身の衝動からすなおに導かれたものだ。論文は結果的に、その衝動の奥の自己分析をさせる結果となった。

論文『妄想する身体』で例に挙げられたポップシンガーたちのPV、その人物中心の構図と挑むような視線。それは平凡なみにくい自己像が大逆転の変身を遂げてきらきらとしたヒロインに転じて見える、「鏡」のようなものだ。自身の冴えない過去のことだけではなく、自分と一心同体のような結びつきである母親の自我や性のありように踏み込んでいく。この論文の執筆は勇気のいることだったかもしれない。平凡にしか生きられない人間の圧迫の中では、いかなるイメージが「憧れ」られ、なにが「強さ」の表象となっていくのか。彼の作品の多くは、憧れを戯画化して失笑を誘いつつも、まじめな道化の瞳の強さによって不意にひとを感動させてしまうという構造を持っている。それは母と自身の同一化ゆえ何重にも入れ子構造になった「多重的な自己愛」の構造そのものなのかもしれない。ラカンの鏡像段階やカイヨワの遊戯の四要素、ヴィト・アコンチの映像作品の構造などを解釈しようと試みた初稿の論文を途中でかなぐり捨て、結局は自伝的要素に終始する論文とはなったが、作家本人にしか書けない赤裸々なドキュメントでもある提出論文の勢いを評価し、合格とした。更に、完成度もインパクトも兼ね備えた提出映像作品群は、非常に高く評価された。